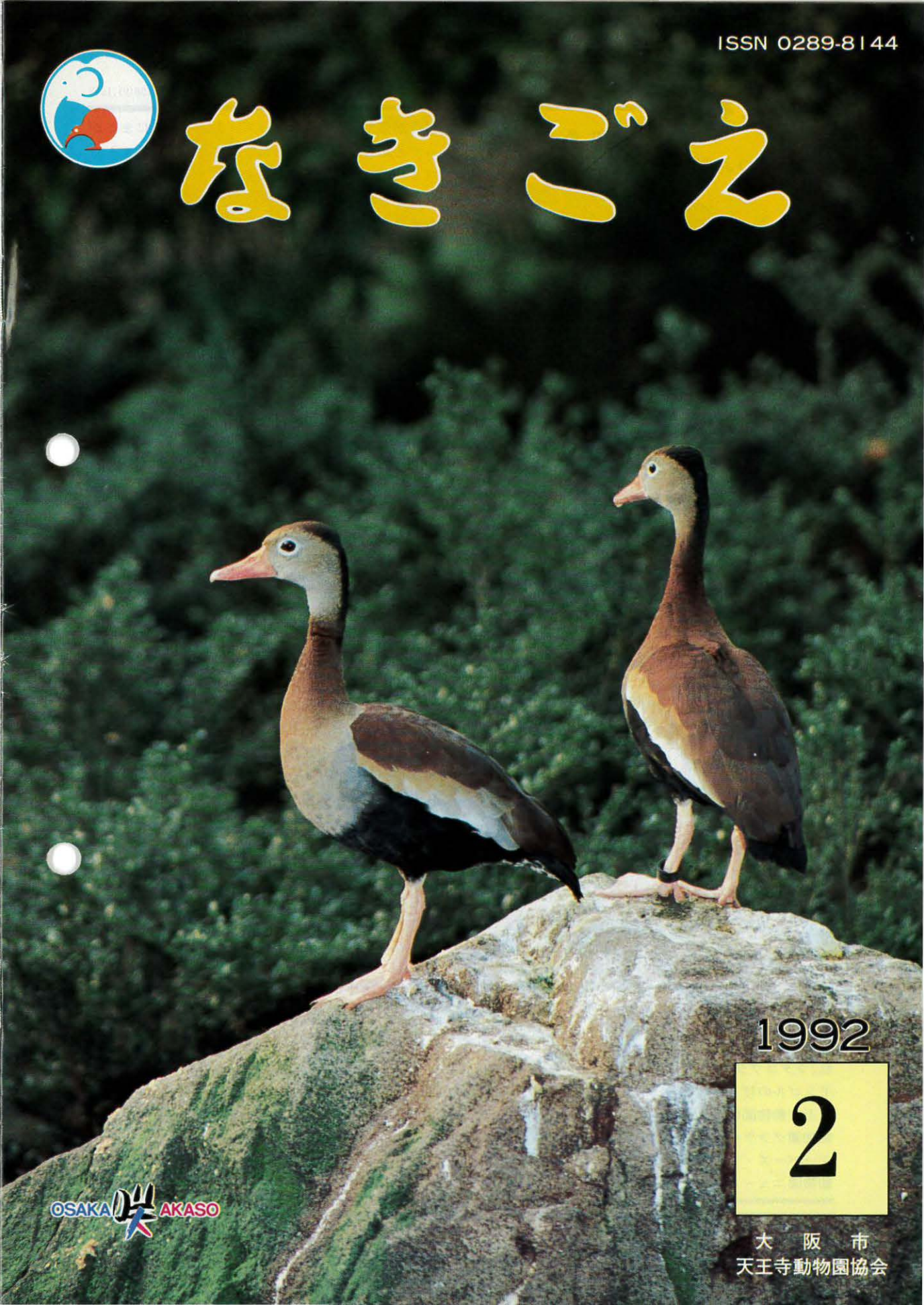
ISSN 0289-8144

なきごえ



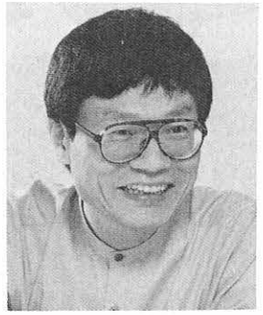
1992
2

大阪市
天王寺動物園協会

動物と私

和多田　勝

“ひとつお願いがございます”



もし、動物園を象徴する動物を、１つだけ（１頭でも良し、１尾、１匹、１羽etc、全部含めて）挙げよー、と言われたら、僕の場合、ちゅうちょなく、“象”を挙げる。

考えてみれば、象徴の象の字は、すでにして象であるが、それは、さて置くとしてもである。

そりゃまあ、別段、人によって、ヒクイドリであってもイルカであっても、チーターであってもいけないとは断じないが、今言う僕の場合は、象である。

それは、どこに原因があるのか、さあっ？　及ぶところ、しかと定かではないが、矢張り幼少時の絵本ですかね。それと、島田啓三さんの冒険ダン吉、あるいは長谷川町子さんがサザエさんより以前に描かれていた漫画で動物園へ皆して行くのがあって、そこに象がいた。当時、天王寺動物園には象がいなかった。それで見たい見たいと思っていた。そんな交々の思いがあってであろうか。

それが、昭和25年だったか、タイから「春子さん」がやって来た。

ここにはじめて、僕ら大阪の子供らは、目の当りに、象を見たのである。

「あ、動いている!!」　僕が小学校２年の時だった。今もあるかどうか、当時、天王寺の動物園内にコンクリートで作られた象があって、これに、僕と兄貴と弟と三人がまたがって、おっと簡単にまたがってと記したが、とてもとても大きくて子供１人ではまたがったりは出来ない。兄弟１人１人順々に親父に抱きかかえられて、象の背に乗せて貰うのである。しかして、またがって、僕は冒険ダン吉となった。もっとも同じく兄貴も冒険ダン吉を主張して譲らなかったが……。

まあいいか、三人ダン吉やと、父は離れて蛇腹のあるカメラで記念撮影。

三人吉三ならぬ三人ダン吉の勇姿は、今も僕の手元にセピア色になって、アルバムにある。

あれから、数えて、42年。

うわーっ、もうそんなに経ってしまって、聞けば、天王寺動物園では、最長の飼育年月になるとか、そらそうでしょうね。１歳そこそこで大阪にやって来て、爾来ずーっと大阪暮らし、ひょっとすると、大阪人の誰よりも一番大阪を離れずにいた、その代表選手が春子さんかも知れない。

それこそ、戦後の大阪史、復興史、ジェーン台風からこっち、まるまる見つめて来たのが春子さん。僕の娘がまだヨチヨチ歩きもヨチヨチ歩き、手をつないでやらないと歩けなかったのが初めて、親の手をふりはなし、独り手で歩いたのも、天王寺の象の檻の前。春子さんと、その春子さんに２ヶ月遅れて、同じく天王寺動物園にやって来た“ユリ子”さんのお二人……、お二人とは言わないがお２頭さんに少しでも近づこうと親の手をふりほどいたのである。気がついたら独り歩いていた。親の目から見ても感動のシーンであった。

そこで、人間で言えば、厄も終えたことだし、ここはひとつそのお祝いもかねて、大阪市と大阪市民は挙げて、大表彰式、大お祝い会を開催しては、と声を大にして、提案――。するものであります。

やりましょうよ。というか、やって下さい。

お願いします。園長さん、大阪市長さん。

（エッセイスト）

なきごえ２月号もくじ

動物と私 …… 2
私、フタコブラクダの“アキコ”です …… 3
モンゴルのげっ歯類 ……4・5
天王寺動物園のオランウータン一家 …… 6・7
動物園グラフ・動物園日記 …… 8・9
キーパーズ・アイ …… 10
動物園ニュース …… 11

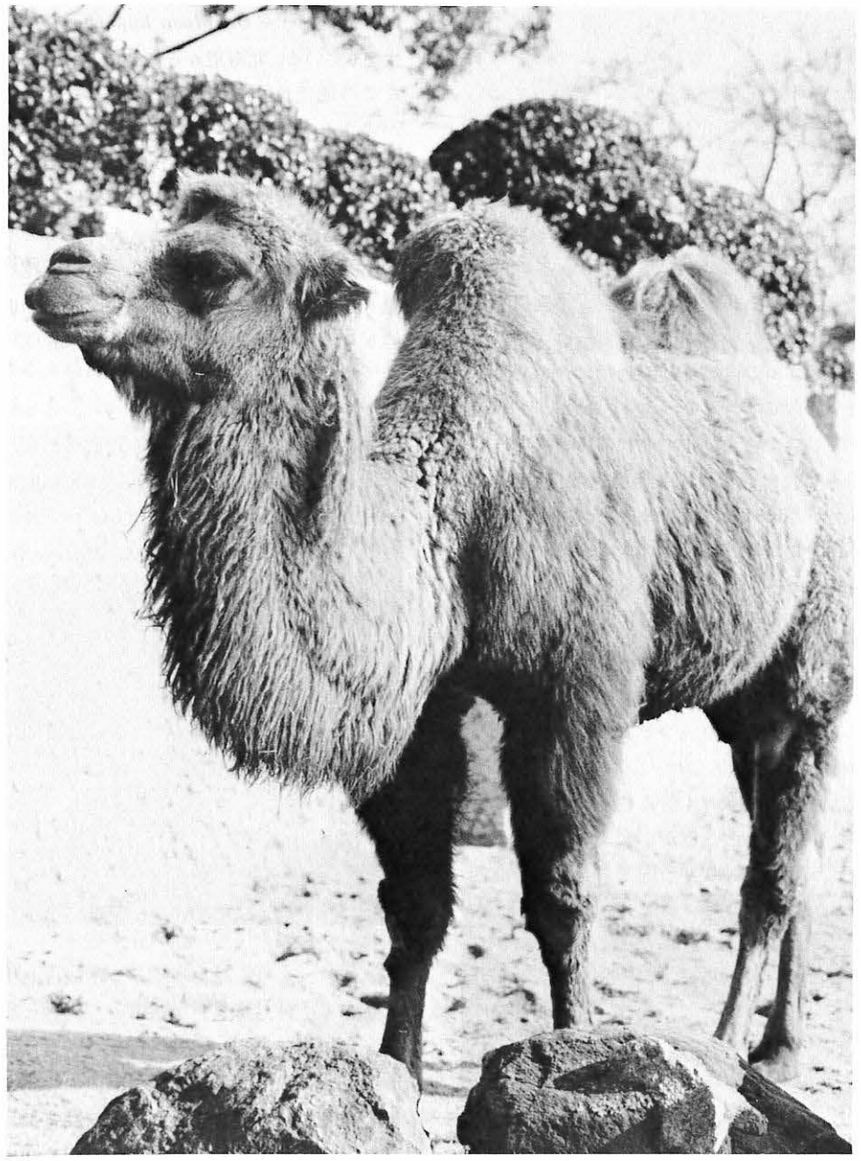
表紙の写真説明

“アカハシリュウキュウガモ”

(Dendrocygna autumnalis)

目の白い縁取りと赤い嘴が特徴のアメリカ産の小型のカモ。キョキョキョキョと可愛いい声で鳴きます。

（撮影：竹田　正人）



私、フタコブラクダの“アキコ”です

昨年11月21日に、秋田市大森山動物園から動物交換でやって来ました。まだ１歳９か月で体も小さいですけど、愛嬌たっぷり。きっと天王寺の人気者になってみせるわ。

（写真と文：飼育課　森本委利）

モンゴルのげっ歯類

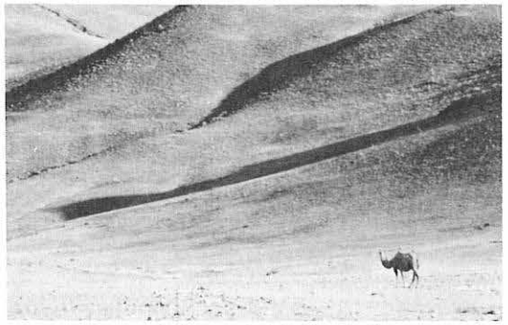
川道武男

1991年は、日本でモンゴル・ブームといってよいほど、モンゴルについて紹介された。すでに一昨年からチンギスハーンの墓探しやらでマスコミが盛り立てていたが、海部前首相のモンゴル訪問でモンゴル関係のテレビ番組がいくつも放映された。昨夏は日本からの観光客も爆発的に増加した。モンゴル側は、社会主義の崩壊、経済的に依存していたソ連の体制崩壊で、まさにゆれにゆれた年でもあった。

しかし、モンゴルの自然と野生動物については、ほとんど紹介されてはいない。ヤギ・ヒツジ・ウマがかける、果てしない大草原。それだけのイメージしかない。そこには、どんな野生動物が息ずいているのだろうか。1991年の夏、モンゴルで野生動物の調査をする機会が舞い込んできた。大阪外国語大学の小貫雅男教授をリーダーとするゴビ・遊牧地域研究開発を目的とした、ゴビ・プロジェクトに参加することができたのである。私の専門のナキウサギを調査するだけでなく、モンゴルの野生動物の生息状況を調べることも目的の一つであった。

§ 針葉樹林の動物

モンゴルは面積が日本の4倍あるのに、人口が約220 万人しかいない。ところが、家畜の総数は人口の約10倍という牧畜で成り立つ国である。国の北西



ゴビ・アルタイ山脈とラクダ

部はハンガイ山脈とゴビ・アルタイ山脈の荒々しいうねりがあり、南東部はゴビ砂漠を中心として地平線が続く平坦部である。北部は雨量が多く、森林が発達している。首都ウランバートルは、ちょうど森林帯と草原帯の境にある。

ウランバートルの郊外にある丘陵はカラマツなどの針葉樹林におおわれている。そのところどころに、かなり大規模な岩の崩れた露岩帯がある。そこでは、キタナキウサギ *Ochotona hyperborea* が岩の隙間に生息している。北海道から直線でざっと2500キロ離れたこの地でお目にかかったキタナキウサギは、亜種が違うエゾナキウサギとは鳴き声がやや違っていた。エゾナキウサギの声紋と比較するために、彼らの鳴き声を録音した。この岩場ではシベリアシマリス *T. amias sibiricus* もいるし、森林にアカシカ *Cervus elaphus* がいる。森林の林床に咲く花は北海道で見られるものが多かった。旧北区の生物群集が草原のぎりぎりまで来ているという印象を受けた。

§ 草原のジリスたち

7月5日、私たちはウランバートルを出て、西へ向かった。今年は日照りでかんばつの状態であった。草は元気がなく、花の季節というのに期待を裏切られた風景であった。平原にポツポツと地蔵様のように立っているのは、タルバガン *Marmota sibirica*

タルバガン

である。ユーラシアのマーモット属は北アメリカから分布を広げたとされているが、種数は少なく、平らな場所に住むマーモットはこの種だけである。

モンゴル人は多数のタルバガンを殺す。彼らは春から秋までは家畜を殺さず、乳製品にほとんど依存していて、わずかにラクダなどの干し肉を食べる。そのためにタルバガンは貴重な動物タンパク源である。法律的には8月中旬までは狩猟禁止であるが、あまり守られていない。

このタルバガンは、ペストの保菌者である。そのため、ときどきタルバガンを料理してペストによる死者がでる。そうなると、その地域一帯が立入禁止になる。また、タルバガンのペスト保菌率を調べるチームが、地域を巡回する。ペストはタルバガンにつくノミが人間について吸血して感染するとされる。

しかし、中国の青海高原に生息するヒマラヤマーモット *M. himalayana* の方が、チベット族の死者がひんぱんに出るように思えるし、きわめて恐がっている。それでも食べる。そして死者が絶えない。

また、砂漠性のジリス *Spermophilus erythrogenys* も日中にみかけたが、いつも単独行動であったし、密度は低かった。

§ 昼と夜のネズミ類

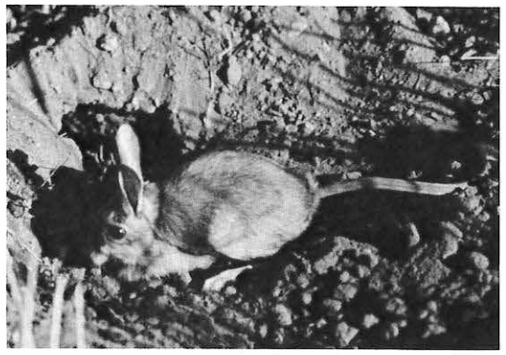
モンゴル中央部にある県都バヤンホンゴルの草原に変わったネズミがいた。5～8メートルくらいの範囲に巣穴が多数あり、日中にそこから数頭が半身を出して立ち上がり、「チンチン……」と鳴き続ける。

ケープノウサギ

現地ではウーリーツァガーンと呼ばれ、*Lasiopodomys brandtill* という。このチンチンネズミは昼行性で、きっとおもしろい社会をもっていると思われた。あまりに高密度にいるので、草原が裸地近くになるまでに荒されていて、害獣視されている。このネズミと同じ場所にいるのが、やはり昼行性のヒナタスナネズミ *Meriones meridianus* であった。スナネズミは実験動物として日本ではよく知られている。

夜行性のげっ歯類はヘッドランプで歩き回って探した。ゴビ砂漠のスターはなんといってもイツユビトビネズミ *Allactaga bullata* であろう。カンガルーに似た長い後肢と長い尾、大きな耳と大きな目が特徴である。もう1種似たようなトビネズミがいた。この2種は後肢で跳躍していくのだが、その速度はまさに目がくらむほどであった。草の根元を手で掘って何か食べていたが、たぶん隠れていた昆虫を大きな耳と目で見つけるのだろう。ある朝に、イツユビトビネズミが熱心に自分の巣穴を拡張工事していた。1メートルの至近距離でたっぷりと観察できた。

これらの高速移動するネズミとは違い、ゴソゴソ



イツユビトビネズミ

と動いているのはハムスターの1種ヒメキヌゲネズミ *Phodopus robororskii* であった。短い四肢、ずんぐりした体、背中にヤマネのような黒い筋がある。夜には食料を盗みにきた灰色の毛色のネズミもいた。

ゴビ・アルタイ山脈は、ゴビ砂漠に幾本かの山脈が北西から南東の方向に走っている。その斜面にはモグラ塚が点在している。これはモグラネズミ *Myospalax aspalax* が地下から盛り上げた塚である。モグラネズミはモグラのようにトンネルを掘り、植物の根などを食べる。

モンゴルの哺乳類相は、意外と複雑である。タイガに生息する森林性のげっ歯類と、ゴビ砂漠の砂漠性のげっ歯類がおり、さらにアルタイ山脈の山岳性のげっ歯類もいると思われる。どの生態系も一般に単純で、げっ歯類の種数は多くはない。しかし、この3つの生態系がモンゴルを分割しているために、全体として複雑なげっ歯類相になっている。

森林性のげっ歯類は日本、ことに北海道と共通の種がいる。しかし、モンゴルと中国北部から中央アジアに至る乾燥した地域には、独特のげっ歯類が多数生息している。たぶん日本のげっ歯類と共通した種はいないであろう。この乾燥地域より1,500～2,000メートル標高が高い青海・チベット高原がこの乾燥地域に接している。ここではモンゴルの砂漠性の種と近縁の種や、ヒマラヤ山脈の山岳性の種が多く出会う生息環境である。この地域で日本人はほとんど調査をしていないが、アジアの哺乳類相を把握・理解するためには、今後多くの研究者が入るべき地域である。

（大阪市立大学理学部生物学教室助教授）

天王寺動物園のオランウータン一家

天王寺動物園にいる、オランウータンの家族を僕（サブ）が紹介をしたいと思います。

まず僕は昭和61年４月27日、父ブルと母サツキの長男として生まれ、生後50時間後に母の乳が出ないことがわかり、人工哺育で育ちました。ですから今５才と９ヶ月になります。顔も真黒になり、あごひげも立派になって、もう少しで大人の仲間に入れるものと思っています。飼育係の人に言わせると、僕は小心者でこわがりだそうです。自分では人以外に接する機会が、なかったので、そのようになったものと思っていますが、でも性格は大変良いと、ほめてもらっています。顔もまあまあ、体力も十分あり、やさしいところは父ゆずりです。最近は以前のように飼育係の人があまり遊んでくれないのが残念なのですが、飼育係の人にいわせると、大人のオスになるためには、ぼちぼちと必要以外の接触はさけて、自立し立派に子供をつくるための肉体と精神を鍛えているとのことなのでしんぼうをしています。あと３～４年もすれば僕自身が父のような立派なオスのオランウータンになっていることでしょう。

若い頃の僕

僕の父（ブル）と母（サツキ）

§　父（ブル）のこと

それでは父を紹介します。父ブルは昭和43年８月に当園に元いた♂と交換で神戸市立王子動物園から来たそうです。そのころの父は今の僕よりも小さく（当時４才）かわいい子供だったそうです。父は数年後に♀と同居をしたのですが、その♀とは相性が悪く、すごいケンカをしたように聞いています。それで今の母と一緒になってからは相性が合い夫婦仲良くやっているようです。でも飼育係の人の話では父は性格は良いが、ちょいちょいすねるらしく、なかなか屋外放飼場に出ないとぼやいています。年に何回か母と同居することがあるのですが、その時は母の手をしっかりと握って絶対に離そうとしないので、部屋に入って餌を食べている時でも、周囲を気にしながら少しでも母と別れさせられそうになると、あばれだすらしいのです。そんな父ですが母が昨年より少し体調をくずし、以前のようにあまり同居をさせてもらえないので、寂しがっています。オリ越しに母を見ては、悲しそうな顔をしているそうです。でも体は健康で食欲も旺盛で、立派な体格に似合わないほどやさしくて、いやなことはすぐに忘れてしまうおおらかな性格をしています。もう少し辛抱すると、母の体調もよくなって二人で手をつないで屋外放飼場で遊べると思います。

§　母（サツキ）のこと

母サツキは昭和48年に生後約２才ぐらいで天王寺動物園へ来たそうです。母の生い立ちは、大変複雑で、ボルネオから密輸入されて、一般の人が飼っていたものが摘発されて入園したとのことです。当時は、栄養状態も悪く体も貧弱でとにかく丈夫に育てることだけを考えていたようで、将来、子供を産めるなどとはとっても思っていなかったそうです。そして６年後には一人前の大人の♀になったのです。それから父との出合いがあるわけですが、父は以前同居した♀とは大変相性が悪かったのですが、母とは相性が良く何のトラブルもなくスムーズに同居ができたそうです。そして母にとって大変印象的な１回目の出産がくるわけですが、なにしろ初めての経験なのでめずらしく大変興奮してしまい、出産の学習もないことから子供を強く抱き締め圧死させてしまいました。

それで２回目の出産でいよいよ僕が生まれてくるわけですが、それは前回の出産より２年後の昭和61年４月27日早朝のことです。前に言ったように僕は２日程で母の手から離されました。母は僕を生んだ１年２ヶ月後に妹ユキを出産したのですが、その妹も１年後に死亡し、うまく育ってくれませんでした。そして昨年は、子供が欲しい欲しいと思う気持ちから想像妊娠を起し、大変めずらしくて、苦痛な一年を経験したようです、あれから体調があまりおもわしくなく、太った体がなかなか元に戻らないし、生理が時々不順になると言っておりました。しかし、母もまだまだ若いので、後２～３回は出産し、弟や妹を作ってくれるものと期待しています。母は今の飼育係の人ともうまくやっているようで飼育係の人も母のことはいつもほめています。しかし、お客さんにも愛想が良くて、お客さんを見ると手をさし出してお菓子等をねだるので、お菓子の食べすぎで、むし歯になったり、胃腸をこわさないかと飼育係の人が心配しています。“でも、やっぱりお菓子はいつもの餌よりは、変化があっておいしいものなあー!!”

妹のユキを抱いた母サツキ

§　お嫁さん（モモコ）のこと

そして最後になりましたが昨年、僕の所に嫁いで来たモモコです。モモコは僕と同い年で昭和61年11月14日横浜の横浜市立野毛山動物園で生まれました。そして２年後の昭和63年10月３日に宮崎のフェニックス自然動物公園に移っています。そこでベテラン飼育係の橋口さんと出会い、色々と手ほどきを受けて、カギを開けて見たり、カメラの前に立って、お客を写真にとったりして一躍有名になり、テレビやラジオ、新聞雑誌などをにぎわした、なかなかの才女なのです。その彼女をフェニックス動物園の方々のご好意で僕の嫁さんにと貸して下さいました。（嫁入りを貸すとはちょっとおかしいでしょうが動物園では繁殖を目的にした貸出しをブリーディングローンといい、今回もその１例です。）その彼女のモモコが来るまでが大変で飼育係の人は僕のことなどすっかり忘れたかのようにモモコのことばかりを考えていたようです。そして飼育係の人と飼育係長が僕のために、わざわざ宮崎まで出かけて、モモコを見に行きました。そして帰って来てからがまた大変。モモコが来るまでの間じゅう耳にタコが出来るぐらい僕の耳元でモモコは良い子や、良い嫁が来るぞと言い、おまえももっと良い子にしないと、嫌らわれるぞ！と言われてばかり。そして待ちに待った10月15日がやって来ました。僕以上に飼育係の人は、そわそわしているようでした。そして、僕の隣の部屋にモモコさんが入って来ました。僕は飼育係の人から良い子にしていないと駄目だぞ！と何度も言われていたので、モモコさんが入って来てもじっとおとなしくしていました。はじめて若い女友達を見たので僕はあがってしまい、アッケにとられ、はずかしさで網ごしに見に行けませんでした。部屋の隅にかくれたり、でも気になってのぞくと、また部屋の隅にかくれたりしました。そして何日かたって、飼育係の人が一緒に遊びなさいと、間仕切りのシャッターを開けてくれたのですが、はずかしくて、そして怖くて近よれません、一時間程そんなことをしていると飼育係の人の声が聞えました。“サブは根性が無いなあー”といってシャッターを閉めました。僕もしまったと思ったが後の祭り。今度は頑張ってモモコさんの部屋に行くぞ！と心に誓いました。そして１週間後に２回目の同居を行いました。今度は待ってましたとばかりに、シャッターが開くとすぐにモモコさんの部屋に行って体に触わりました。するとどういうことでしょうか。モモコさんが逃げるんですよ。僕は追いかけて仲よくしようとするのですがモモコさんは逃げます。体の大きさは僕の半分ぐらい、そしてしつこく追いかけていると、またも飼育係の人が入って来てモモコを抱きあげ、“今日はここまで”、またも残念。

嫁いできたモモコ

たくましく成長した現在の僕

そして飼育係の人は、“ここでは狭いから暖くなったら広い屋外放飼場で一緒にしよう”だって。それからずっと一緒にしてもらっていません。しかし、毎日隣の部屋にいるので網ごしにのぞいています。春ごろには、モモコさんも大きくなって屋外放飼場で一緒に遊べると思います。

以上、家族の紹介をしましたが今年は僕達にとって待ちに待った新しい家が隣組のチンパンジーと一緒に出来き上がります。夏頃には一家で引越しをして新しい寝室と、新しい屋外放飼場に住みます。今度のオランウータン舎はケージ式といっていままでのモート式（濠式）と違って格子と網で出来ているので高い所まで遊びに行けるし、隣には父母の屋外放飼場があるので一家が勢揃い出来ることもあると思います。今年は僕達類人猿にとっては、良い年になると思います。

（飼育課：原田　勉）

動物園グラフ

“わたしモモコで～す”

「みなさん、はじめまして。私は去年の10月に宮崎県のフェニックス自然動物園からやってきたオランウータンのモモコで～す。今日は私の新しい家族を紹介するわ。」

（撮影：竹田正人）

「まずはこの人、担当の飼育係の原田さん。ちょっとこわい時もあるけど、私のことを一番心配してくれるの。お父さん、お母さんがわりってとこかな。」

「これが今の私の部屋。もともとサブちゃんの部屋だったんだって。ちょっと殺風景で狭いけど、今年新しいお家ができるって小耳に挟んだから、それまで辛抱辛抱。」

12月の動物園日記

12／ 1．第７回天王寺動物園写真コンクールの入選作品展を展示室で開催しました。

12／ 2．大阪府下で違法飼育されていた日本特産のアカヒゲのオス２羽が警視庁に摘発され、当園に保護収容されました。
隔離飼育していたダチョウのオスとメスを同居させました。
熊本動物園で開催された全国動物園飼育技術者研究会に当園職員２名が出席しました。
埼玉こども動物自然公園の大島主査ほか４名の方々が来園されました。

12／ 6．ホシハジロのオスを１羽保護しました。
千葉市動物公園副園長の宗近氏と帯広動物園の柚原氏が来園されました。

12／ 9．バーバリシープ５頭とカワウ６羽をシンガポール動物園に贈りました。

12／10．1970年にエチオピア政府から贈られたアビシニアライオンのメスが老衰で死亡しました。

12／11．ハイタカを１羽保護しました。

12／12．レッサーパンダのメスを福井県の鯖江市西山動物園から借り受けました。

12／15．第80回動物のお話とスライドの会で「動物園裏側ウォッチング」を行い43名の入園者の方々が参加されました。

12／20．ブラジルバクのメスの赤ちゃんが生まれました。

12／21．ワライカワセミのメスを秋田市大森山動物園に贈りました。
ホシハジロのオスを１羽保護しました。

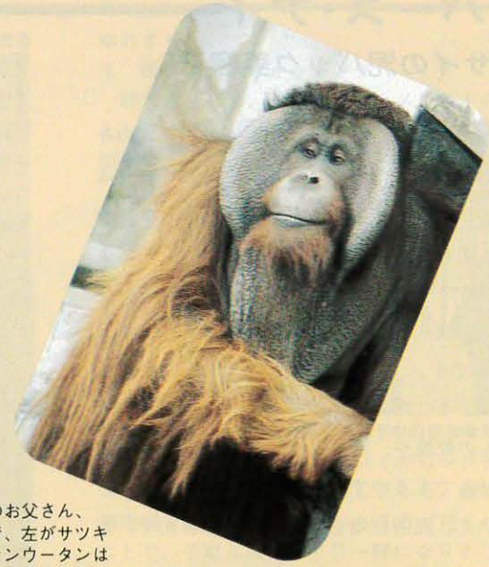
12／23．タヌキ３頭をはじめとする６種９点の保護動物を自然復帰させました。

12／24．11月26日から産卵し親鳥が抱いていたハワイガンの卵を検卵したところ４卵とも無精卵でした。

12／25．新春恒例の干支にちなむ動物舎の〆縄かざりをサル島など３ヶ所に飾り付けました。

12／29．当園で生まれたアカハシリュウキュウガモ５羽を「鳥の楽園」に展示しました。
12月12日に鯖江市の西山動物園から来園したレッサーパンダのメスを初めてオスと室内展示室で同居させました。

12／30．多摩動物公園から借受中のコウノトリのメスを上海動物園から来園したオスと同居させました。
ブタオザルの赤ちゃんが寒さのため動物病院に入院しました。



「次にサブちゃんの両親、つまりわたしにとっては義理のお父さん、お母さんになる人？を紹介するわ。右がブルお義父さんで、左がサツキお義母さん。二人はとっても仲がいいの。でも、私達オランウータンは森の中で単独生活をしているから、動物園でも普段は別々に暮らしているのよ。」

「最後は、サブちゃん。私の未来のだんなさん。とってもおちゃめなハンサムボーイよ。最近、ほっぺのひだもちょっとでてきて男らしくなってきたの。」

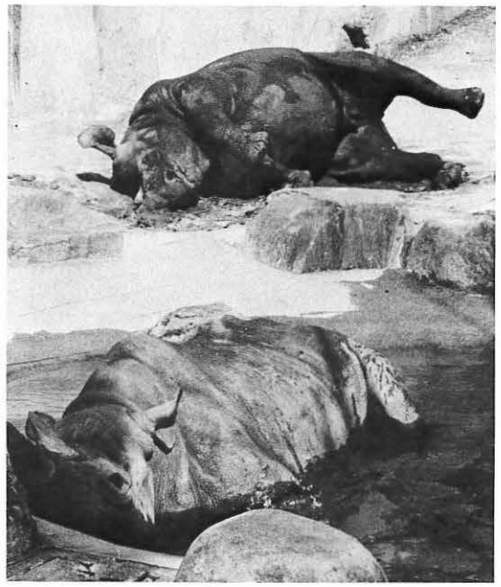
「これはサブちゃんが小さいときの写真。とってもかわいいでしょ。」

「じゃ～ね。何かの機会にまた会いましょう。バイバ～イ。」

キーパーズ・アイ

“クロサイの泥パック美容法”

現在天王寺動物園には、オスのトミー、メスのサッちゃんの２頭のクロサイが暮しています。彼らはとても泥浴びが好きなのですが、泥だらけのクロサイを見た入園者の中には、「ワッ！このサイきたないなぁ泥だらけやぁ」と、心ない事を言う人達がいます。しかし彼らが泥だらけなのにはとても重要な訳があるのです。クロサイの皮ふは、とても硬くてよろいのようにみえますが、実はとてもデリケートで、皮ふの乾燥や、寄生虫から身を守るために泥浴びを、好んでするのです。夏の暑い日にグランドに水をまいて、泥浴び場を作ってやると喜んで、大きな体を一回転させて、泥浴びをします。最近若い女性に流行している美容の泥パックではありませんが、彼らは彼らなりにおはだの手入れに気を使っているのです。クロサイは現在密猟のため、その数が激減しています。いつまでも彼らのすばらしい姿が



見られるよう、みんなで大切にクロサイを守ってやってください。

（飼育課：農 本 武 志）

＊＊

“モモイロペリカンの別離とペアリング”

昨年１月にモモイロペリカンのメスが、ツル舎からバードケージに引越しして、１年が過ぎました。放鳥の際、興奮してフェンス等の激突を防ぐために風切羽を切り落して、放しました。モモイロペリカンのメスは以前、インドトキコウと同居しており、とても仲のよい個体でした。旧水禽放養舎の鳥達は今のバードケージが出来た時にうつしましたのでトキコウも一緒でしたが、しかし、インドトキコウが木にとまったりしても羽を切られているペリカンは下からながめているだで近づくことはできません。はじめの頃はインドトキコウもモモイロペリカンが近づいてくると下に降りてきて、羽ずくろいをしたり、一緒に行動していたりしていました。その年の春にモモイロペリカンの若オスを入れて、インドトキコウを宮崎のフェニックス自然動物園に送ったので、最初は、親友のインドトキコウを捜し回ってさびしがっていましたが、今では若オスといっしょに行動し、お客さんの人気者になっています。大きなモモイロペリカン二羽がバードケージの中を飛び回ることを楽しみにしています。

（飼育課：久田　治信）

動物園ニュース

§　第7回天王寺動物園写真コンクール入賞者決まる

当園では、「秋の動物と花のフェスティバル'91」の一環として昨年10月13日(日)から11月17日(日)まで、「動物いきいき」をテーマに第７回天王寺動物園写真コンクールを開催し、作品の募集を行ってきました。11月20日に動物写真家の内山晟氏をお招きし、審査会を開き、大阪市長賞、花と緑の推進本部長賞を始めとする入選作品29点を、応募総数173点の中から選考しました。なお、入選作品の展示は12月１日(日)から28日間にわたり、園内展示室で行いました。

写真コンクール入選作品展

§　レッサーパンダのメスの来園

西山動物園からお輿入れの“麗麗”

昨年12月12日、福井県鯖江市の西山動物園からレッサーパンダのメスを１頭、繁殖のためにお借りしました。当園には、平成元年11月に中国の上海動物園からいただいた１ペアを飼育していますが、今だ子宝に恵まれないことから、今回、西山動物園のご好意で、１頭のメスをブリーディングローンで借り受けることとなったものです。今回お借りしたメスの名前は“麗麗”（れいれい）。昭和61年に西山動物園で生まれたもので現在５歳、すでに２回の出産経験があります。２月頃には発情期があると思われますので、当園のオス“シャンシャン”との相性さえあえば、今年中にはかわいいレッサーパンダの赤ちゃんがみられるかも知れません。

§　動物園裏側ウォッチング

昨年12月15日、動物のお話とスライドの会の一環として、恒例の「動物園裏側ウォッチング」を開催しました。参加者は43名あり、出発前の注意事項をきいてからレクチャールームを、２班に分かれて出発しました。動物舎や病院、調理場など日頃見られないところが見られるということで、予定人員はすぐに一杯になりました。今回は、ホッキョクグマの動物舎見学からはじまり、ゾウ、サル・ヒヒ、トラ、爬虫類、調理場、病院、ボイラー室と順番に見学しました。

ゾウ舎の寝室を見学中の参加者たち

§　ブラジルバクの赤ちゃん誕生

昨年12月20日、ブラジルバク（アメリカバク）のメスの赤ちゃんが１頭生まれました。この赤ちゃんの母親“マーガレット”は、来園してから今回が３回目の出産で、先の２回の出産は、ともにオスの赤ちゃんが生まれています。マーガレットは今年11歳で、父親の“ボーイ”より１歳年上ですが、ともに相性はよく、子育ても上手で、先の２頭も順調に育っていることから、今回も問題はないことでしょう。なお、今回の最終交尾は、一昨年の11月24日で、妊娠期間は392日でした。

生まれて６日目のブラジルバクの赤ちゃんとその母親

現在の飼育動物数

（平成３年12月31日現在）

哺乳類	12目	93種	445点
鳥類	20目	169種	815点
爬虫類	3目	30種	92点
合計	35目	292種	1352点

＊ 休園日のお知らせ ＊

動物園の休園日は毎週月曜日（休日の場合は翌日）です。

開園時間は午前９時30分から午後５時までで、午後４時まで入園できます。

愛ある暮し、応援します。

Kintetsu

近鉄百貨店

DEAR LIFE BOOKS

生態・飼育・図鑑が一つの本の中にギッシリ

中川道朗・岩合徳光／監修
B５変型判・オールカラー
定価600円

動物園で暮らす様々な生き物達、自然の中ではどんな暮らしをしているのか？　動物園での世話の仕方は？　仲間は？　など、写真と精密イラストをまじえ紹介します。

くらしとかいかたシリーズ＜既刊本＞
B5変型判・オールカラー・各定価580円

むし くらしとかいかた
野山でみかける身近な昆虫たち250種を紹介。

ちいさないきもの くらしとかいかた
昆虫以外の小さな生き物を320種紹介。

お求めは、お近くの書店で。　ひかりのくに株式会社　本社／〒543 大阪市天王寺区上本町3-2 ☎06-768-1151代表

室内装飾設計施工・バラエティ雑貨卸

1st ファースト商会

〒559 大阪市住之江区平林南１丁目２番５７号
ヘッドビル２０２号
ＴＥＬ 06-686-4033　ＦＡＸ 06-686-4032

オートフォーカスカメラに

フジカラー SUPER HG 400

ピントが合いやすいフイルムです

カメラの大林
桜橋本店　☎341—8091
阪急三番街店　☎372—5031
OHVAC店（ギャレ大阪）　☎346—7606

全国の愛犬家の共感を呼ぶ無比の愛犬歌集　絶賛四版

歌集犬の歌　平岩米吉著

著者が、約四十年の間に、共に暮らした七十余頭の犬の生と死を歌った四百十九首を収録。同時に、その誕生より老齢に至る写真四十七図を収めた、犬の一生の生態写真集でもある。

天金・美装箱入
Ｂ６判・270頁
3000円・〒不要

《感動の言葉》
☆ この歌は愛犬と異体同心の境地である。（英文学者）
☆ 人として注ぎ得る愛情の極致を示している。（動物研究家）
☆ 一首ごとに、ことごとく魂にひびく歌です。（動物愛護家）

●本書は、書店ではお買い求めになれません。直接当会へお申し込みください。

〒152／東京都目黒区自由が丘3-12-2　動物文学会　電話(03)717-1659／振替・東京5-9800

新作
貸出用ビデオ「楽しい天王寺動物園」
19分（10本常備）

天王寺動物園の本

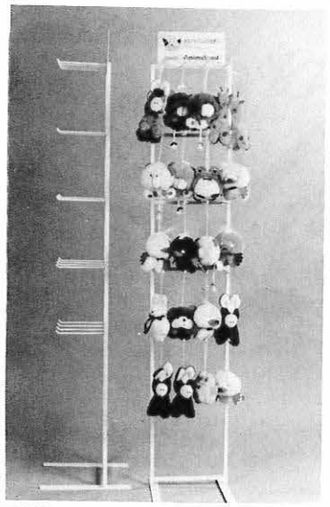
入園の記念・手引に……

●対　　象／保育園・幼稚園・小学校の先生
●貸出期間／10日間
●貸 出 料／無料（但し郵送料480円は必要）
●申 込 先／当協会まで手紙かハガキでお申込下さい。

コアラテレホンカード（限定販売）
好評発売中 ¥800（50度用）

オールカラー
500円
園内売店にあります。

大阪市天王寺動物園協会　〒543 大阪市天王寺区茶臼山町6-74 ☎(06)771-0201

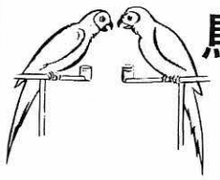


動物ぬいぐるみは
子供のゆかいなお友達

各種ぬいぐるみ企画・製造・卸

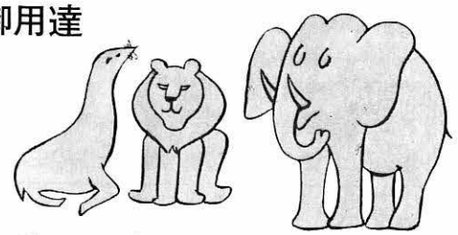
有限会社 **アニメランド**

〒547 大阪市平野区西脇４丁目５番22号
TEL：(06)704－８５８０
FAX：(06)704－８５６５



鳥獣輸入

全国動物園水族館御用達

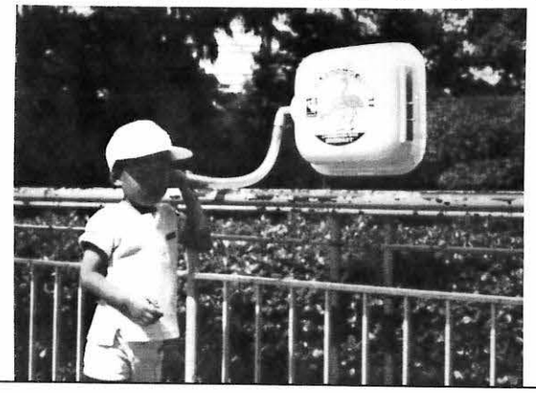


- 医学実験用動物
- 宣伝用、テレビ用、貸動物
- 原色世界雑類図鑑（34種1枚もの）要郵便券250円

有限会社 **吉　川　商　会**

本　社　神戸市中央区中山手通３丁目11番４号　電話(078)221-8195㈹
飼育場　兵庫県小野市来住町１５１３番地

たのしい〝動物のお話〟は、
ガイドマシン（動物説明機）で、どうぞ!!



園内、主要動物舎
30数ヵ所にあります

関西特機株式会社
電話 06-762-2333
1回　20円

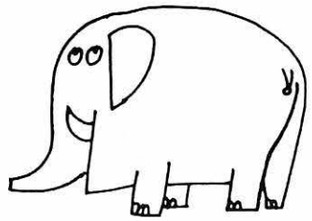
動物園内での
お食事、ご休憩は

大阪市天王寺動物園内

中　央　売　店

☎ (06) ７７１－０９７３

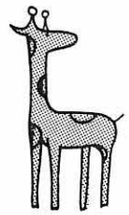
天王寺動物園内



南園売店

大阪市天王寺区茶臼山町６－74
電話（06）７７１－７１１０番

園内でのお写真は…
動物園協会指定写真部へご用命下さい!!



◎随時係員が待機しておりますのでご説明に伺いました際は、よろしくお願い致します。

カラー写真 キャビネ1枚 **500円**

撮影無料にてキャビネ1枚をサービスさせて戴きます。
撮影予約も受付しておりますのでご連絡下さい。

国際航空写真株式会社
ＴＥＬ 06－856－7444

雪印

Our yogurt has fruity and rich texture!!

"生イキヨグール"と覚えてね。

しぼりたてミルクのおいしさが、生きている。

雪印 ヨグール

希望小売価格　130g／各120円　250g／各220円(税別)

HIJIRI-KOJIMA

一日
愉快に
たのしめる!!

◎園内3ヶ所(南園高架下・北園中央デッキ北側・北園高架下)に各種〝のりもの〟があります。

久竹娯楽株式会社
TEL(06)541-3938(代)

なきごえ　1992年2月10日発行（毎月10日発行）第28号　第2号　（通巻318号）

編　集／大阪市天王寺動植物公園事務所　〒543 大阪市天王寺区茶臼山町6—74
発行人／大阪市天王寺動物園協会 土井良彦　電話 大阪 (06) 771—0201
印刷所／株式会社 松村善進堂　定価150円(送料共) 1年継続(12部) 1,650円(送料共)　振替口座 大阪3—3782 3

編集委員（中山良三郎／村上　昭／中尾啓一／樽本　勲／中川哲男／吉本昌俊／山根和弘／大谷直樹／宮下　実／長瀬健二郎／榊原安昭／森本委利／竹田正人／永田健一／前田　茂／大野尊信／野口秀高／早川　篤／赤松　健／大川光雄／土谷正道／山本貞幸）